

## 富山大学公開講座「心とからだの心理学」

### 第5回：「軽度発達障害者の体験世界と援助について」

NPOここねっと発達支援センター 理事長 佐藤 秀明

Hideaki Sato: Support to a person with mild developmental disorder  
and their inner experiena world

#### 1 はじめに

軽度発達障害のある子どもたちの教育的な支援については、「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」と「特別支援教育のガイドライン」が文部科学省から示された。このことによって地域におけるセンター的な役割を担うことが期待される支援機関（発達支援センター・発達相談センター・教育研究所等）の特別支援教育に関する

相談活動（小・中・高校への支援活動）は、大きく様変わりしようとしている。

中学・高校・大学・養護学校等で教育相談やカウンセリング・生徒指導を経験し、校内における教育相談（校内支援）と地域における小・中・養護学校を対象とした教育相談（地域支援）を担当した筆者の経験と照らし合わせてみると、今回示された「最終報告」と「ガイドライン」は小学校・

#### 教育現場に必要な心とからだの支援機能の項目とコンサルテーション

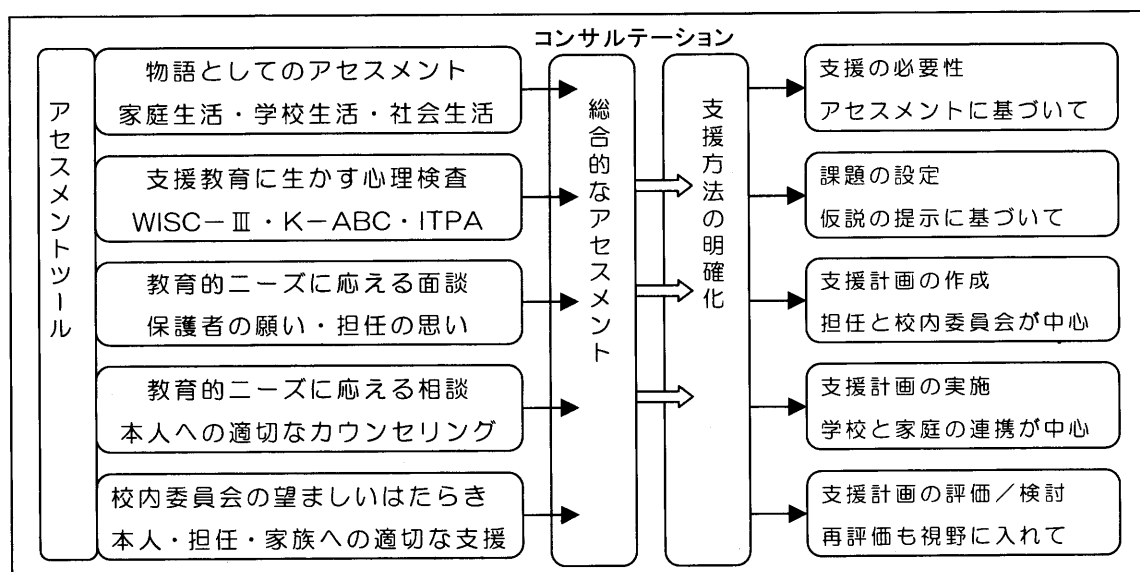


図 1

中学校現場からの軽度発達障害関連の相談活動のニーズに応えることのできるものと評価できる。いくつかの課題は残されているものの「障害の程度に応じ特別の場で指導を行う『特殊教育』から障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う『特別支援教育』への転換」を明確にしたことで、支援機関の地域におけるセンター的役割としての果たさなければならない具体的な支援活動の内容と小学校・中学校で必要としている適切な支援教育への取り組みがようやく一つの連続性の中で考えることができるようになったと実感している。

そこで今回は、小学校の通常学級に在籍する「適切な支援教育」を必要としている児童への「教育現場に必要な心とからだの支援機能」(図1)を参考に、体験世界を通して受講者の方たちとともに発達障害のある子どもの教育的なニーズに応じた適切な支援教育の在り方をめざした取り組みとコンサルテーションについて考えてみたい。

## 2 小・中学校での取り組み

### (1) 心理検査と心のアセスメントの必要性

これまでの教育現場では、心理検査のプロセスと結果を十分に機能させることができない状態が続いていると言わざるを得ない。数値としての検査結果を出すことはできても、その数値に基づく解釈やプロフィールの分析までには至らず、せっかくの検査の結果をその子の指導計画や支援計画に生かすことが出来ないでいるケースが数多く見られた。しかしながら、心理検査は、個別の教育支援計画、個別の指導計画、個別の移行支援計画等を作成する際には必要不可欠なものである。さらに、「特別な支援教育」を必要としている子どもたちへのアセスメントだけでなく、学校・保護者に対する支援活動やコンサルテーションを行う際、あるいは医療や福祉、就労といった領域との連携を図っていく際にも心理検査は中心的な役割を果たしていくことになると考えられる。

このことは、心理検査を重視したアセスメントを背景にした教育相談と、個別支援計画を意識した

教育的な指導の方針や認知の特性に応じた支援内容を導き出し、いこうとすることに直結しており、小・中学校における支援を展開する時には不可欠なものとして認識されなければならないと考える。

### (2) 総合的な教育アセスメントに役立つ心とからだの心理学

次の表は、対象児全体のアセスメントに必要な資料の項目と内容である。これらの項目をもとに支援教育を実施していくことになる。担任や担当者はこれらの項目に基づく背景情報をより具体的に得ることで、心理検査の結果と合わせて、子どもの得意なところ(強いところ)苦手なところ(弱いところ)に関する仮説を立て、その仮説を検討・修正し、特別教育支援計画に役立てていくことになる。

総合的な教育アセスメントに必要な資料 表1

①在籍状況：学年、出席状況、特徴的事項等
②主訴：問題点・課題点を含めた主訴の把握
③家族関係：父母、兄弟等の家族構成、地域社会生活における心身の状況
④家庭環境：本人の家族に対する態度、教育的関心、しつけの仕方、文化的環境等
⑤生育歴：胎児期・出産異常の有無～基本的な日常生活習慣の状況、生活スタイル
⑥身体状況：現在の健康状況、運動機能の状況、食欲、体力、睡眠状況、感覚器官(接触過敏等)、視覚認知、聴覚認知、空間認知～
⑦学業成績：就学前教育、学習態度、行動の特徴、学習スタイル、言語、数量、記憶
⑧交友関係：友だちに対する態度や行動、学級や学校における本人の居場所など
⑨心理検査：知能・学力・性格・適応性や認知発達の特徴、検査実施中の観察記録など
⑩教育的判断：上記9項目の資料に基づいて総合的な支援教育的に関するまとめの資料

### (3) 小学校からの相談事例 (A君)

- ①在籍状況：小学校1年生（相談時） 男子AD / HD（1年生の時に診断）小さなトラブルは抱えているもののほとんど欠席することなく登校。現在3年生。
- ②主訴：集団の中で社会性を身につけ、学習面での遅れをどのように補ってあげればよいのか。
- ③家族関係：両親と祖母、弟の5人家族。リタリンを服用し、心身の安定を図りながら、家庭生活・学校生活に臨んでいる。（④・⑤・⑥は省略）
- ⑦学業：好きなことにはいつまでも集中しているが、苦手なこと、興味の無いものには集中が続かない。自分の目で見えるものは理解できるが、文章や相手の言葉を理解できないことが多い。漢字が苦手。
- ⑧交友関係：担任はA君を中心に学級経営を考え、クラスでの生活面や学習面での支援体制について積極的に取り組もうとしている。
- ⑨心理検査：K-A B Cを実施。結果の解釈とプロフィール分析を行い、アセスメント資料を作成。
- ⑩教育的判断：心理検査によるアセスメント資料と教育相談資料をもとに、担任、両親とのケース会議。その後学校側はコンサルテーションを要請。

### 3 支援センターの取り組み

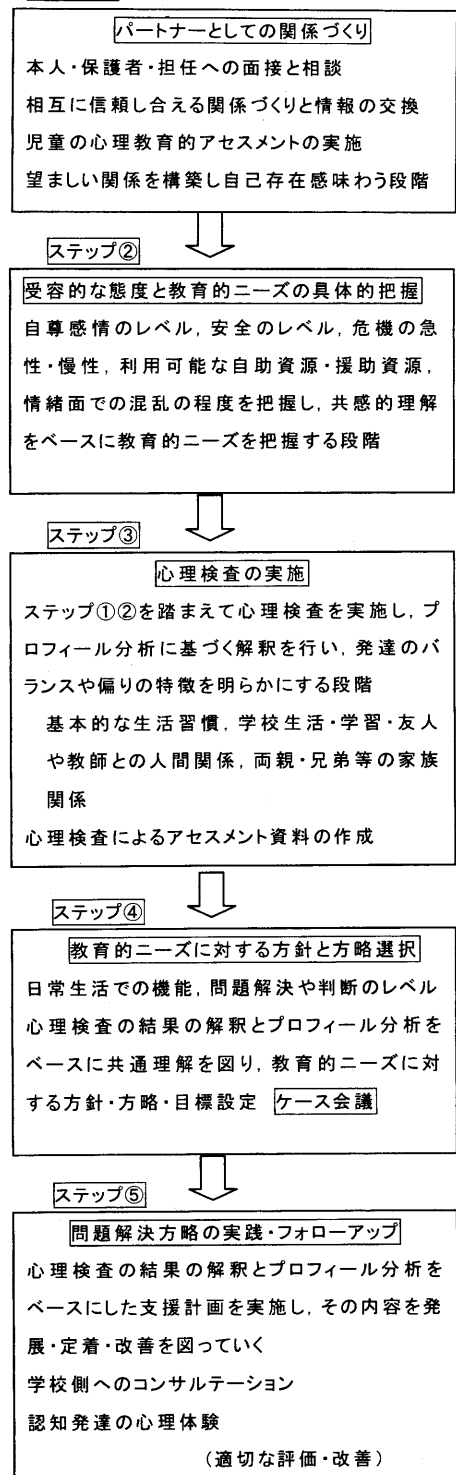
#### (1) 本人への適切な支援体制

特別支援教育での心理検査は、LDやAD/HDであることを判断するためだけのものではない。検査中の様子や検査の結果を本人とともにどのように解釈し分析して具体的な理解・配慮・支援に結びつけるかが重要になってくる。

心理検査を重視したアセスメントは、子どもにとってよりよい学習スタイルや生活スタイルを見つけ、子どものよさを生かしていくことにある。その実現に向けて家庭と教育現場がどう協力し合っていくことができるか課題となっている。

右の図は具体的な支援活動の内容と小学校・中

具体的な支援モデル 表2



学校で必要としている適切な支援教育への取り組みが一つの連続性の中で考えることができるようになっていくためのモデルである。

ここでは「ステップ④」の「ケース会議」を例にその取り組みについて具体的に提案する。

- ①支援指導の方針：特別支援教育としての意義・方針および目的を確認する
- ②経過報告：支援の対象となる児童について、資料を基に説明する
- ③主訴確認：誰が何に困っているのかを説明する（本人以外の場合もある）
- ④長期目標：得られた情報によって打ち出した長期目標候補について説明する
- ⑤長期目標設定：長期目標にふさわしいものを討議して選出する（期間も設定）
- ⑥指導者：目標を達成するためにどの場面で誰が直接的な支援を行うか決める
- ⑦短期目標と課題：長期目標を達成するために段階的に短期目標を設定する  
短期目標を達成するためにどのような課題を設定するかを担当指導者を中心に討議する
- ⑧次回会議日程：「ステップ⑤」の計画の実践と評価に向けて次回会議日を設定する  
このように子どもへの支援のモデルをきちんと提示することは、本人への適切な支援体制の基本である。

## （２）コンサルテーションと心理体験（：A君の相談事例を通して）

小学校からの教育相談のほとんどは、クラスでの学習や生活に関するものである。そして、保護者からは、学校や担任教師への理解と支援を求めるものがほとんどである。そこに「心理検査を重視したアセスメントと支援モデル」をもとにコンサルテーションを展開することは、これからの特別支援教育を考えるに当たり重要なポイントの一つになってくるものと考えられる。表3はコンサルテーションに用いた資料で、できるだけ分かり易く情報をデフォルメし、ケース会議の話し合いの際にも使えるようにしている。（A君の事例）

- 小学校からの相談事例（A君）：この後担任は、ケース会議を経て、A君がクラスの一人として活動できる場面や居場所を確保できるような声がけと役割分担を明確にした。見通しや目的意識を持って活動に臨めるように班活動や日直・給食当番・掃除当番の取り組みを改善していった。また、校内委員会は、担任とA君を理解し、配慮・支援していくために全職員を対象に認知発達のパランスや偏りに関する心理体験の研修を企画し実施した。（記憶困難・注意集中・言語コミュニケーションの心理体験）

## （３）主訴に対する経過と学校全体へのモデリング効果

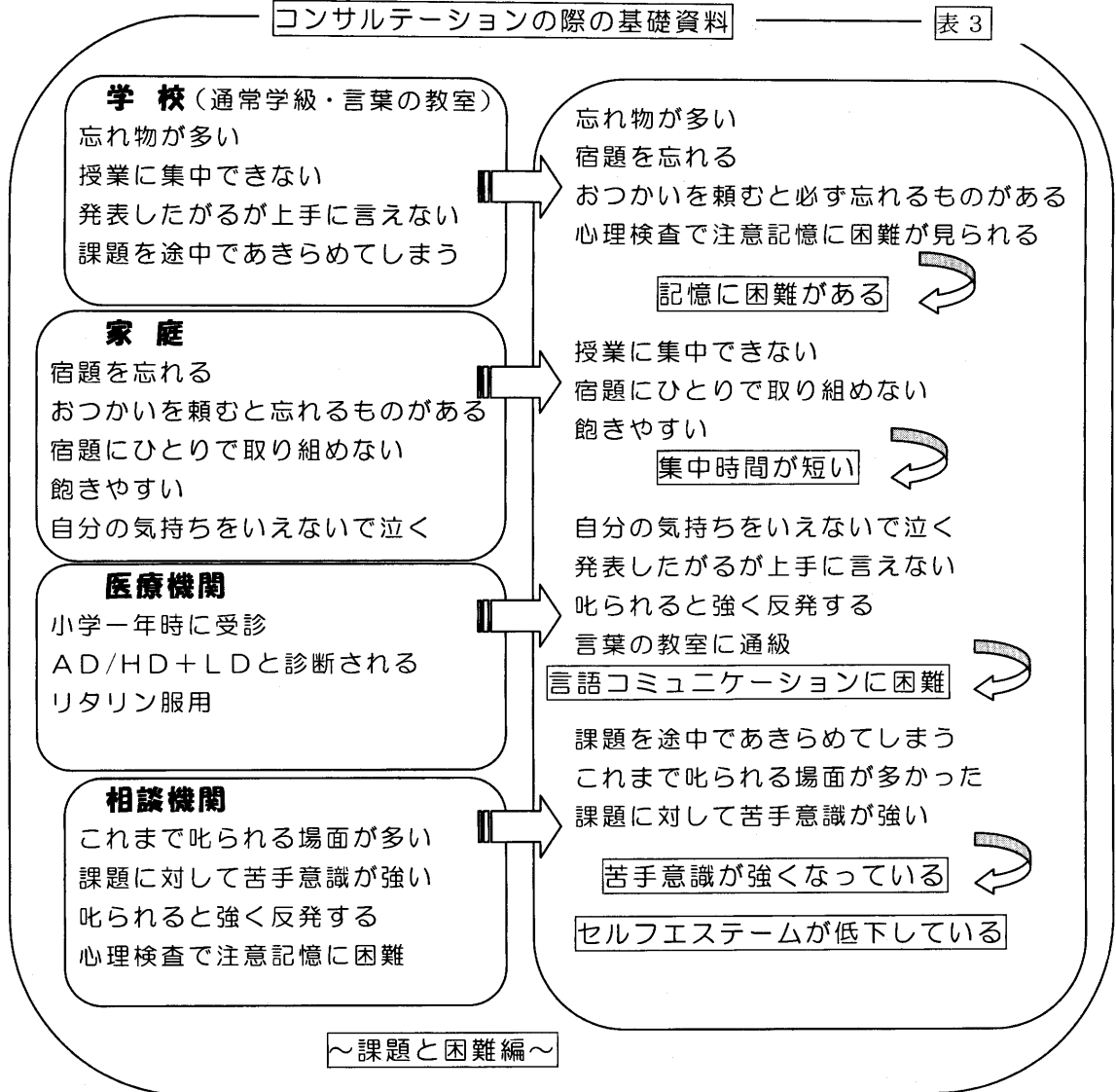
学級：K-ABCによる心理検査をもとにプロフィール分析を行い、A君の認知発達の特徴に応じた授業を展開。待つ支援と個別の支援体制を確保し（TT等）、分かることへの実感を大切にした授業を組み立てていった。その結果、少しずつ分かることの楽しさが実感できるようになると、授業中の集中力や注意力に変化が現れてきた。（学習面での自信の回復）

通級：集団での生活に適応していくために自分の行動を振り返ったり、他者の気持ちを考えて行動できるような言葉でのコミュニケーションに重点を置いた支援を展開。書写の個別支援を実施。身につけた力を少しずつ学級での学習や生活に生かすことができるようになりトラブルも減少しつつある。（生活面での社会性の向上）

これらの一連の取り組みが、教職員全体のAD/HD、LD、PDD等に対する共通理解の校内研修（認知発達の偏りに気づく心理体験を含む）の充実に発展し、校内の特別支援教育に関する委員会の活性化へと結びついていくこととなる。また、担任と校内支援委員会は、個別の教育支援計画を策定し、その支援体制を模索し始めた。さらに学

コンサルテーションの際の基礎資料

表 3



級担任は、心理検査を含めたアセスメントにもとづいた具体的な取り組みを個別の教育支援計画の中に位置づけ実践していくことで、支援に対する自信と見通しを持って学級経営に臨むことができるようになった。そして、保護者、特に母親は、AD/HDを理解し、子どもへの支援を担任と協力して取り組んでいこうとする姿勢が伺えるようになっていった。父親も子どもの背景にあるAD/HDを受け入れつつあり、次年度への要望（親

の願いと本人の思い）の引継ぎに父親も参加し、スムーズに行われた。

このように支援センターが果たす小学校への支援（本人・担任・保護者への支援）は、より具体的で実際的でなければならない。そのためには、小学校の教育課程はもちろん、学校経営（教育計画）～学年経営～学級経営について精通しておくことが最低条件である。そして、担任の先生方との信頼関係を軸に「自分のよさを知ること」、「互

いに認め合うこと」ができる取り組みの接点を見つけ出すことから始めていく必要があると考える。その中心には必ず子どもの姿がなければならないことは言うまでもない。

#### 4 おわりに

「特別支援教育」は、一人一人の教育的ニーズに応える形での支援の展開を求めている。そして、クラスの中で学習することや生活することへの支援を具体的に行っていくことが個別の教育支援計画に求められている。そのために最も大切なことは、クラスの中で本人の姿をどう捉えるかである。毎日の学習や生活の中から教育的ニーズのサインを読み取ることである。担任の先生が今一番必要としているのは、クラスの中での本人の姿を適切に捉えるためにはどうするかということであり、支援センターに求められているのは、学級で生活している本人に対しての体験世界に基づくきめ細かなアセスメントとそれを生かした支援である。本人とその子が生活するクラスへの支援ができる取り組みが今まさにスタートし始めた。そして、「特別支援教育」への"転換"のためには、教室の中で苦戦している子どもと先生のいる教室という現場に足を運ぶことから始めなければならないということを再確認したい。「みんなが資源、みんなが支援」を合い言葉に。